

牛と共に歩む道

宮城県農業高等学校

三年 土谷 移月

月明かりが差し込む暗い独房の中、命の灯火が消えようとしている。彼女の命を繋いでいたのは細い管だけ。私は顔を優しく撫でて見守ることしかできなかった。

今から二年前、農業高校へ入学した私は牛好きが講じて牛舎に通い始めた。すぐに出産に立ち会うことになり、初めて見る生命の誕生に感動を覚えた。七月七日に生まれた白黒の子牛は七夕にかけてミルクと名付け私が育てることに。

放課後はミルクと乳牛六頭が私を待っている。搾乳、エサやり、除糞、やることは多かったが充実した日々を過ごすようになった。

暗くなるまで糞と埃にまみれ、街に遊びに行く普通の女子高生とかけ離れた生活だが、そんな生き方が気に入っていた。

二年生になると、ミルクが妊娠したことを知り、新しい家族が増える日がとても待ち遠しかった。しかし、そんなささやかな想いが打ち砕かれるとは考えもしなかった。

出産予定日の十日前、携帯に「ミルク危篤」という連絡が入る。パニックに陥りそうな自分を必死に抑えながら学校へ向った。

牛舎に置かれた一輪車にはシートがかけられ、怖々と中を覗くと、目を閉じて舌が出た状態の赤ちゃんが横たわっていたのだ。この受け入れ難い現実を突きつけられ、呆然と立ち尽す私に先生は

「死んだよ」と声をかけてくれた。その瞬間、何一つしてあげられなかった無力さと悲しみで涙が止まらなかった。

最悪のことを想定してミルクの元へ向かうと、いつもの様子で横たわっている。「生きていた」と安心したのは束の間、立ち上がろうとしない。いや、立つ事が出来ないのだ。

子牛が産道を圧迫したため下半身麻痺に陥っていた。ミルクは私にとって大事なパートナーだがペットではない。搾乳ができない牛は価値がなく安楽死しか残されていないが、この状況で私に「諦める」という選択肢は微塵もなかった。子牛には何もしてやれなかったがミルクはまだ生きている。せめて「ミルクだけでも助けたい」の一心で自分が出れることをしようと決意した。

下半身にシップ、足には軟膏を塗り、常にミルクの部屋を清掃した。立えないミルクの胃にはガスが充滿し、命に関わることから腰を鎖で吊って強引に持ち上げて寝返りをさせなければならぬ。鎖が痛々しく身体に食い込むのを見ながら「ごめんね」と声をかけて身体を吊り上げる。ミルクの命を繋いでいたのは点滴という細い管だけ。何も改善する兆しがないまま三日が経過し、身体は痩せ細り私の希望も光も消えていった。

四日目になるとついに獣医師から「明日、立たなければ厳しいね」と宣告され、安楽死が一刻一刻と近づいていた。その夜、ミルクの側を離れられず顔を撫でていると奇跡が起きる。突如、下半身に力を入れ始めた。私は思わず「頑張れ」と声を上げると、自力で立ち上がったのだ。すぐに倒れたが、目の前の奇跡に声をあげて泣いた。

それから二か月後、私とミルクは牛の骨格競

う宮城県共進会の会場にいた。私は牛を引くりードマンとして、ミルクと共にプロの酪農家が集う大会に参加すると優秀賞を受賞。諦めないで最後まで命と向き合い信じ続けた結果だった。

現在、私は命を繋ぐ獣医師になるために勉強をしている。ミルクは話せなくても体温、糞、匂い、声、目で私に語りかけてくれる。今では牛達と五感で気持ちを通じ合えるようになった。ミルク達と同じ時間を過ごすことで心が成長し、将来の目標を定めることができた。今度は私が牛に恩返しする番だ。酪農家は一頭、一頭に愛情を注いでいることを知っているからこそ「命」と「想い」を守りたい。もちろん、辛い命の選択を迫られる時もあるだろう。しかし、諦めない心が力になることを牛から学ぶことができた。だから私は自らが描く未来へ進むことができる。

真つ青な空の下、今日も汗と埃にまみれよう。そよ風に揺れる牧草の中でミルク達と共に生きる。それが私の選ぶ道だから。

『私のしごと』作文コンクール第11回大会（特定非営利活動法人仕事への架け橋主催）
文部科学大臣賞 受賞作品

思い出を飲み込んだ黒い波

宮城県志津川高等学校

三年 佐藤 成美

皆さんは今生きていることを実感していますか。毎日を何となく過ごしていませんか。家族がいる友達がいる、おいしいご飯が食べられる、そういう幸せを感じているでしょうか。私は正直五年前までは、そういう日々が当たり前で、自分の環境が恵まれているなどと思ったことはありませんでした。しかし、その考えが一変される出来事が起こったのです。

忘れもしない二〇一一年三月十一日、私は当時中学一年生でした。その日は卒業式の前日で、卒業式の練習を終え帰りの会の最中でした。突然長い揺れが私たちを襲ったのです。避難訓練を毎年行っていることもあり、すぐに机の下に潜りました。しかし、心のどこかでは「またか。どうせすぐに収まって笑い話になるだろう。」と思っていました。ですが、一分、二分と揺れているのです。周りの友達には不安や恐怖を感じている表情でした。そのうち、棚やロッカーからは物が落ちてきて、窓ガラスは割れてしまいそうでした。やっと揺れが収まり、本当の避難場所は体育館だったのですが、電球が落ちてきそうで危険ということで校庭に避難しました。町内放送では今まで聞いたことのない「大津波警報」の声。私は信じられるはずもなく、何かの間違いだと思っていました。そんな時、私たちはジャージしか着ていなかったの上着を取りに教室に戻ることになりました。初め

に数人で学校に入ると、まず目に入ったのは床に散らばったガラスでした。賞状が飾られたガラスケースは地震に耐えられなかったようです。仕方なく靴のまま教室に向かい、上着を持ち校庭へと戻りました。私は学校の近くに住んでいたもので、近所の人たちが避難して来ているのを見て少し安心しました。体育館通路の方に目を向けると人だかりができていました。私の学校は高台にあり木に覆われているのですが、その通路の方からは町の様子が見えるのです。私は意地でも見に行きませんでした。すると集団から飛び出し、校庭より高いところを求めるように十メートルくらいの崖を登る先輩の姿が見えました。その人に続けと先生も

「登れ！」と叫ぶように指示を出しました。津波に対する恐怖が急に現実味を帯びてきたため、私も一心不乱に崖を登りました。小さい子どもやお年寄りに手を貸す先輩方がとても頼もしかったです。ほとんどの人たちが登り切り、ふと校庭を見ると、黒い波に車が何台も流されている様子が見えました。あたりには泣き声が響いていました。そんな中追い打ちをかけるように雪が降ってきました。寒かったので火を焚いているところに移動すると、両親と姉に会うことができました。私にはもう一人姉がいるのですが、遠いところに住んでいるので大丈夫だろうと安心することができました。しばらくして山の方を進み近くの建物へと移動しました。十畳ほどの部屋に中学生全員が集まりました。硬い床の上なので何度も姿勢を変えながら、そこで一晩過ごし朝を迎えました。外に出てみると皆悲しい顔をして話をしています。町を眺めてみる

と、そこには見たこともない光景が広がっていました。まるで水浸しの模型のようでした。もちろん見えるはずの私の家も流されてなくなっていました。自然災害なので誰にもぶつけることのできない気持ちですが、もどかしく辛かったです。中学校の二階だけは被害が少なかったもので、二日目はそこで過ごしました。

三日目の朝には部活動でお世話になったコーチの方がパスタを持って来て下さり、噛み締めながら食べました。そして午後に、被害のない場所へ歩いて移動しました。歩いている途中には、流されたものや逃げ遅れた方を搬送する様子を目にしました。目的地に着いてからさらにバスで隣町の避難所に向かいました。その後、私は親戚の家にお世話になりました。そこで、電気が使えない生活というのはとても大変なことを知りました。当たり前は当たり前ではないということを、常に頭の片隅に置くようになりました。

あの日から五年が経ち、私自身は感謝する気持ちが大きくなりました。物資などをいただいたことから、私も元気に頑張ろうという気持ちになることができました。全国や海外の方々には感謝してもしきれません。

これからこの町はどのようなようになっていくのでしょうか。今がれきなどはもうありませんが、復興のゴールはどこなのかわかりません。しかし、皆が何不自由なく暮らせて何より笑顔で過ごせる町になってほしいと思っています。

My determination

被災地と世界をつなぐ

通信案内士への道

宮城県農業高等学校

二年 星 みのり

(私はそばを活用した地域復興プロジェクトチームに参加しています。)

I take part in a local recovery project involving soba. (そばには無限伸張性という特性があります。花が咲いた後もそばが伸び続ける様子を震災から復興し続ける宮城県の姿に重ねてそばを栽培してきました。)

Soba has a special characteristic of limitless growth. After soba flowers, it continues growing. That is like how Miyagi continues recovering.

(いじめずに紅白のそばを播種してそばアートを作成したり、収穫したそばを打って仮設住宅で振る舞ったりしました。)

We used two different colors of soba flowers, which are red and white, to make a work of art. And then we made soba noodles and gave them out to people who lived in temporary houses.

(多くの人に元気になってほしい、笑顔になって欲しいという思いで活動続けました。)

This activity has made lots of people happy. We hope to make people feel better by continuing this activity.

私は今「そばを活用した地域復興プロジェクトに参加して」のこと。そばを選んだ理由。これまで活動してきた内容。そして多くの人の元気と笑顔のために活動を続けてきたこと。を、英語で皆さんにお伝えしました。なぜ英語で伝えたのか？それは、私たちの活動を海外へ発信したいと考えているからです。

私が参加しているプロジェクトチームは農業と観光を組み合わせることで被災地に新しい雇用を生み出すことを目標に様々な活動をしています。そのひとつにARグラス

ラスを使った観光事業があります。ARグラスは眼鏡の形をした特殊な機械で、取り込んだ立体映像を目に見える風景に重ねて見ることが出来ます。震災当時の状況や復興について知りたいと思っている観光客の方に、ARグラスを使って名取市の震災前・震災直後の様子を見てもらうことや、あの大津波を体感してもらうことが出来ます。震災の風化を防ぎたいという思いから生まれたこの観光プランは全国高校生観光甲子園で観光庁長官賞をいただきました。このことがきっかけで、今年三月に仙台で開催された「国連防災世界会議」では、私たちが実際にこのAR観光を実践することになり、私も手伝うことになりました。

参加していただいたのは、イスラエルから来られた方と日本人通訳の方数名です。イスラエルの方たちはARグラスを見て「すごい！こんな初めて見た！」と驚かれ実際に映像を見ていただくと、とても悲しそうな顔をしている人や、現在と震災直後とのあまりに違いすぎる姿に衝撃をうけているようでした。この時の観光案内では、通訳の方がいらしたので、言葉に困ることはありませんでしたが、映像を見ているときや、移動中に「Did you live here? Wasn't it serious?」と質問され、イエス・ノーで答えることしか出来ませんでした。このとき、とても悔しかったのと同時に通訳の方の英語力に憧れを抱きました。

私は昔から英語や外国が大好きで、中学三年の夏に、十日間のホームステイに参加したことがあります。ホストファミリーは私にわかりやすいように簡単な英語で話してくれるのですが、まともな会話をすることが出来ず、電子辞書が欠かせませんでした。小さいころから好きだった英語を好きだけで終わらせたくない！と決意した瞬間でした。高校二年の夏にも、JICEが主催する青少年海外派遣事業に参加し、ミャンマーに行きました。しかし、ミャンマーの高校生と交流をすればするほど私は違和感を持ちました。彼らが私たちと交流をはかるとき、母国語のビルマ語ではなく英語でペラペラと話しているのに、私たちは日本語でしか話せず、通訳をお願いしていたからです。これでは二年前の自分と何も変わっていない、と情けなくなりました。せっかく海外の人と交流が出来るのに、自分から話しかけられない、話しかけられても返せない、

い、となるとどうまくコミュニケーションを図ることが出来ません。もっと英語が出来ていれば、活動の幅が広がり、もっと深く交流ができたと思います。

震災以降、私たちは多くの国や人たちにたくさん支援をしていただきましたが、復興が進む今、今度はその人たちに私たちの思いを返していかなければいけません。私たちの活動はコンテンツでの受賞や数多くのメディアに取り上げられることで、国内には広く情報が発信されています。しかし、国外はどうでしょうか？私たちが行っている活動を、日本だけでなく海外へも発信する必要があります。私は考えます。私が通う宮農も、ドイツや韓国から支援していただき、それをもとに復興に向けた様々な取り組みを行っています。これらのことを、大好きな英語を使って、情報を発信することが出来れば、宮農のためにも自分の成長のためにもなるのではないのでしょうか。

国連防災世界会議で行ったAR観光のように、視覚で情報を伝える方法なら海外の方にも伝わりやすい。しかし、言葉のままじゃ交流することが出来たなら、映像だけでなく私たちの思いも伝えることができるはず。そのためにもっと英語力と地元力を身につけなければいけません。

この思いから私は、地元localをglobalな視点から考える力「グローバル」を身につけられる、福島大学へ進学したいと考えています。卒業後は、震災からの復興の歩みを、英語で世界へ発信し、海外からの観光客をガイドできる通訳案内士になりたいです。地域経済を大学で学ぶかわら、ボランティア活動やフィールドワークに積極的に参加し、さらに海外留学にもチャレンジして、表現力を高めます。

(こんにちは、私はガイドの星みのりです。)

Hello, I'm Minori Hoshi, your guide. (今日はみなさんにARグラスを使って震災の前後の被災地の様子を見ていただきます。)

I'd like everyone to see the state of the disaster area before and after the earthquake by using AR glasses today.

いっかこのように、海外の方を案内できるその日まで、私は一歩ずつ歩み続けます。

震災から見つけた自分

宮城県志津川高等学校

三年 佐藤 梨弘

五年前の三月十一日午後二時四十六分、急に大きな揺れが私たちを襲った。その三日後、父が私を迎えに中学校に来てくれた。当時中学一年生だった私は、父と姉といふこと共に歩いて避難先である母の実家に向かった。その道で見た光景はあまりに悲惨な状況で、生涯忘れられない。幸い母の実家は高台にあったため流されず無事だった。当時自宅にいた祖父母と妹は、近所の高台にあるお墓に避難しようとした。そこなら津波が来ても大丈夫だ。しかし祖父たちは逃げ遅れてしまい家ごと流されてしまった。1km流されたが無事脱出し、皆命に別状はなかったという。ただ、恐ろしさのあまり震えが止まらなかつたそうで、当時四歳だった妹はとても恐ろしい思いをしただろう。津波が引いた後、濡れた服でがれきの中をかき分けて母の実家に歩いて避難して来た。高台まで来たときにふと振り返って町を見たときに、祖母はそのあまりの変わりように涙が止まらなかつたという。その話を聞いて、家族にこんな辛い思いさせたできごとは、今後大人になったら必ず子どもたちに伝えようと思った。

避難先である母の実家では電気が使えず、ろうそくとソーラー電気で過ごしていた。余震が続いていた。地鳴りがすると妹はあのを思い出し泣いてしまった。私は長男としてできることを精一杯した。三ヶ月後、ようやく電気がつくようになり、それと共に家族が少し明るくなったような気がした。さらに二ヶ月後には水道が復旧し、復興の兆しを感じる事ができた。学校も再開し、がれきの中を登校した。そのがれきの中に野球ボールがあった。私は小学校から野球を続けてきた。ボールをがれきの中から見つけた瞬間は「もう野球はできなくなるのかな。」と思った。大好きだった野球の道具が流され、グラウンドは支援の車両や自衛隊の方々が使っていたので、とても野球ができる状態ではないと思っただけだった。しかし、少し落ち着いてきて復興が進むと野球ができるようになった。その時はとてもうれしかった。全国の支援のおかげで私たちは震災前の生活に少しずつ戻ることができた。震災で何もかも失ってしまったが、人同士の支え合い助け合いはかえって多くなり、絆が一層深まったと感じる。以前はあまり人の気持ちを考えてあげられなかつたが、震災があつてからは私と同じ境遇の人や辛い思いをしている人を思いやる事ができるようになった。実際色々な人から優しく声を掛けてもらいとても励みになった。これまで支えられた分、きちんと恩返しをしたい。

私は震災をきっかけに夢を持った。それは自衛官になることだ。三月十一日、自衛隊の方々はいち早く私たちを助けに来てくれ、炊き出しや生活必需品の支援を届けてくれた。また、がれきの中、行方不明者を捜索し多くの命を助け出す姿があつた。

「大変だけど、俺たちも頑張るから、お前も頑張れよ。」

と幼い妹と遊んでくれた自衛官が私に掛けてくれた言葉、それが私に自衛官になる決意をさせてく

れた。日本でも世界でも災害は絶えない。今年日本でも豪雨による自然災害が起こった。その中で自衛隊による支援活動を通して、一人ひとりの精神面での支えになり一人でも多くの命を救う、そんな自衛官になりたいと思う。

震災から五年が経ち復興は進んでいるが、いまだに仮設住宅に住む人は多く、精神的にも肉体的にも負担が大きい。いち早く震災前の生活に戻れるよう、私たちが若者が一生懸命働き、少しでも復興に貢献したい。長い時間がかかっても、皆で支え助け合い進んでいきたい。南三陸町は、震災で多くの尊い命が失われ、さらに地元の人たちが町外へ避難してしまい人口が減ってしまった。しかし、南三陸町は自然豊かな素晴らしい町だ。復興を目指して生まれ変わろうとしている南三陸町に元の活気を取り戻し、支援して下さった方々に新しい町をお見せしたい気持ちで一杯である。そして、将来家族ができたときには、東日本大震災を後世に伝え、二度とこうした被害をもたらさないようにしたい。それが自分に与えられた使命だと思っている。

あの時私たちは

宮城県気仙沼向洋高等学校

三年 齋藤 一磨

私達が東日本大震災を経験してから五年目を迎えています。私は当時中学校一年生で、卒業式の会場設営のため準備をしている時に大きな地震が襲ってきました。初めはいつもの地震だと思い、そのまま準備を続けようとしたのですが、今まで体験した事のない揺れと長さで立っているのも困難になりました。先生たちから校庭に避難するように指示があり、体育館や校舎にいた生徒や先生が校庭に集まりました。その時ははつきりとした情報が無く自分たちの判断で避難するような状態でした。恐怖で泣く友達や震えている友達がいる中、中学校の近くに住んでいる人から津波がもう来ていると言われ、校庭から高台に避難しました。みんな避難した後、校庭に津波が押し寄せ、大木や家、たくさんのものが流されていくの間近で見ました。高台から見える水平線には高い波があり、校庭にはすごい勢いの濁流が流れており、地獄かと思うほどの光景でした。言葉にできないほどの絶望感と恐怖を覚えています。

しかし、辛いことだけではありませんでした。震災が起きてから何日か経った後、自衛隊の方々が瓦礫の処理活動を行ってくれたり、有名人がライブやいろいろな活動をして元気づけてくれたり、九州や遠い地方からボランティア活動をしに来てくださったたり、多くの方々のおかげで被災した人たちの笑顔を見ることができました。みんなの笑

顔や少しづつ復興していく気仙沼を見て、助け合ったり、協力して生きていく大切さや、人の温もりを改めて感じる事ができました。普段の生活では感じる事ができない人の優しさに触れることができました。

そして、復興が進むと同時に時が経ち、私は中学校三年生になりました。どの高校に進学するか本格的に決定し、勉強も始める時期になりました。私は向洋高校に入ることを決めていました。本校舎は震災で流されてしまいました。そんな中でも一生涯懸命活動している先輩方の様子を新聞などで見て、向洋高校に入りたいと思いました。

そして、念願の入学が決まりました。向洋高校では、今も授業や実習は仮設校舎で行っています。部活動では体育館や校庭が限られているので他の高校の体育館や校庭を借りるため移動をして部活をしています。移動時間が長く部活ができる時間が少なくなってしまうこともあって不慣れた状態が続いています。しかし、ここまで本格的な実習ができるのも部活動ができるのも、支援してくださった方々や体育館や校庭を貸してくださる方々の支えがあるからだと思います。五年前みんな同じ傷を受けましたが、支え合い、小さな歩幅でも、一步一步前に進んでいると思います。私は東日本大震災を通して周りの人の温もりや、協力し合ったり助け合ったりすること、身近にあるもの

の大切さを実感することができました。これから先、就職をしていくときは、震災から学んだことを生かし、協調性や助け合いの精神を忘れずに過ごしていこうと思います。この震災を忘れること無く、多くの人たちに伝えていくことを大切にしながら、震災の辛さとその体験から

めて感じたことを忘れずに生きていきたいと思っています。



宮城県宮城野高等学校
三年 菅井 良太

私の五年

宮城県志津川高等学校

三年 渡邊 めい

あるとき私は、卒業式の準備のため、昇降口の掃除をしていました。クラスメイトと楽しく話をしていたら突然激しく揺れ始め、飾ってあったトロフィーや下駄箱に入っていた靴が床に落ちてきました。先生に連れられて中庭に避難しました。夜は教室に円を作って、大漁旗を掛けて暖を取りました。皆で不安にならないように楽しい話をしたり、しりとりをしたり、「ふるさと」を歌ったりしました。中には、

「ドラえもん見たかった。」
なんて言っている人もいました。

朝になり、高台の校庭から町を見た私には不安しかありませんでした。「これからどうなるんだろう。そう思いました。その後、父が弟たちと一緒に迎えに来たので、私は高校の避難所に行きました。しかしそこには、歩くところもないくらい人がたくさんいました。それでも家族が全員無事だと知りほっとしました。

次の日から、私は小さい子どもたちの面倒を見るよう頼まれ、体育館で子どもたちと遊んでいました。ちょうどその時沖繩から来ていた自衛隊の方が三線という楽器を弾いていました。夜にも皆の前で演奏してくれました。その音を聴いて子どもたちが興味を持ち始めました。数日後に、自衛隊の方が私たちに四本の三線をプレゼントしてくれました。それはとてもうれしかったです。

それから私たちは三線の練習を始めました。毎日練習し上達していくにつれて、弾くのが楽しく

なり、不安な気持ちを忘れることができました。自衛隊の方とも仲良くなり、そのうち歌も三線も上手な「みっちゃん」という名前をつけてくれました。みっちゃんの提案で、中学校で発表会をしたり自衛隊の方々の前で演奏をしたりしました。しばらくして、みっちゃんは三次隊の方たちと交代することになりました。お別れの日に感謝の気持ちを込めて演奏すると、みっちゃんは

「また会おう。」

泣きながらそう言って沖繩へ帰っていきました。

それから私たちは毎日三線の練習をしました。「もつと上手になってみっちゃんに会おう。」その思いで練習を続けました。そのおかげか、私たちは色々なところから演奏依頼の声がかかるようになりました。長野、埼玉、東京、そして沖繩。沖繩ではBEGINさんの「うたの日コンサート」で演奏しました。みっちゃんと再会を果たすことができ一緒に演奏することができました。本当にうれしかったです。

今も私たちは三線の活動を続けています。もつともつと上手になって、支援してくれた方々や、三線を教えてくれた沖繩の自衛隊の方々に「ありがとう」の気持ちを伝えたい。先日、地元のお祭りやホテルで演奏をしました。たくさんの方に「とても良かったよ。」「これからも頑張つて。」と声を掛けられ、もつと頑張ろうと思えました。しかし、メンバーはどんどん大人になり減っていく一方です。私も高校を卒業するとメンバーとしても卒業することになります。残ったメンバーでこれからも続けてほしいと願うのですが、現実はそのうもいきません。三線を弾ける子が一人しか残らなくなるのです。せめて残された時間で、たくさんのことを教えていきたいと思います。将来

は、私の子どもや周りの子どもたちが「サンシンズ」を受け継ぎ元気がいっぱい活動が続けてくれればいいなと思っています。

子どもも成長と共に変わりますが、志津川の町も日に日に変化しています。私が以前住んでいた所も最近土で埋め立てられました。町の道路もどこを走っているのか分からなくなるくらい変わりました。これが復興なのだろうかと考えさせられます。町に住んでいる人が、これから町がどうなるのか分からないのに町はどんどん変化していく。本当にこれでいいのだろうか。もつと町の人の意見を聞くべきではないか、私はそう思います。実際私も、家族もこの南三陸町がどんな町になるのか分かりません。それがとても不安です。このような復興に果たしてみんなが納得するのだろうか、少なくとも私は納得できません。これから若い人たちが町の将来を担っていくのに、その若い人たちが町のことを知らないで生活して良いのでしょうか。一部の人たちが知らない、そんなの変だと私は思います。

私は町外で就職が決まったため、一旦町を離れますが、地元で過ごせる残された時間で、町について知り、町づくりに参加していきたいと考えています。そして、いつ帰ってきて私の大好きな明るくて自然豊かな南三陸町であつてほしいと願っています。

震災から今日までの四年を振り返り、私は震災で辛い思いもしましたが、それ以上に楽しい思い出ができました。震災があつたためにたくさんの経験ができました。大きく成長することもできました。震災は自分に大きなものを与えてくれた――私はずう考えています。

日本と韓国の架け橋から

流通拡大を目指して

宮城県農業高等学校

三年 吉岡 葵

「岩沼にまた、白菜がふえたよ。」「ありがとう。」「もつともつと増やして世界中に広めていきましょう」韓国総領事館のリ・ウジョンさんが笑顔で私達にこう言ってくれたのです。私が、産業界と連携して、今までやってきたことが実を結ぶことができたのです。

東日本大震災によって、沿岸部の農地が流出してから、今年で四年二ヶ月が経ちました。四年の間に、少しずつ塩害の被害の畑は再生されてきて、約九十%以上が回復されてきていると言われています。

「農業の力で地域の役に立ちたい。」という気持ちにはなりませんでしたが、農業にもほとんど興味がありませんでした。入学して間もない頃、生活科の先生から、「震災で、学校の高館地区でも耕作放棄地が増加している。地域に協力しよう。」と言われたのです。その一言で、今まで人ごとのように思っていたことが、自分の身のまわりで起こっていることに気がついたのです。今までの自分は、農業には全く興味が無かったのですが、「耕作放棄地」という言葉に、事の重大性に気付いたのです。「農業高校生として、なんとかしなくては……。」と、気持ちが変わってきたのです。

そんなとき、JA全農みやぎの針生さんから、「高校生の君たちに力を貸して欲しい。放棄地に、伝統野菜を植え付けたいんだ。」と言ってきたのです。私は、クラスメイトと一緒に、JA全農みやぎの針生さんと、早速名取市高館の耕作放棄地へ大豆八千株分を栽培し、収穫作業に参加したのです。針生さんは「これで、被災地の畑が再生できる。本当にありがとう。」と言ってきたのです。

高校一年生の私にとっては、初めての活動でした。私は、JAの針生さんからの言葉で、「農業の力」、「野菜作りの重み」をしっかりと実感することができたのです。そして、「もつともつと、地域のために活躍したい。」と考えるようになってきたのです。

そんなある日のこと、生活科のプロジェクト活動で、仙台白菜のことを聞いたのです。JAの針生さんから、「仙台白菜はふるさと宮城県の伝統野菜だ。韓国と連携して耕作放棄地で栽培を拡大させよう。」と誘われたのです。私は、「これだ」と感じたのです。早速、仲間や産業界と協力し一万六千本分を播種したのです。

苗は順調に生育し、九月一日には、耕作放棄地となったいた、佐藤さんの畑へ四千本を定植、九月九日には、岩沼市玉浦地区の津波の被災地の再生のために地域住民へ発芽した白菜の苗のうち、四千本分を手渡すことができました。雨の日にもかかわらず、リ・ウジョンさん、岩沼市民百名、市長さん、味の素株式会社、全農みやぎの代表の方々と共に、無事に植え付けることができました。

私は、その後、この二カ所の畑に足を運び、苗に生育調査を定期的に行ったのです。現地へ到着すると、定植した畑に、四千本の白菜の緑色が私の目に、飛び込んできたのです。

ちょうどその日、岩沼の畑の持ち主である森さんに出会うことができました。森さんは「しっかりと育っているよ。畑に緑が戻ったよ。ありがとう。」と笑顔で答えてくれたのです。

被災地の再生に役立つ白菜を、今度は、食材として活用していただけたのです。なんと、韓国総領事館と連携し、仙台国際ホテルに三百名の県民を招いての白菜キムチフェスティバルの開催にこぎ着けたのです。

二年生に進級し、韓国総領事館のリ・ウジョンさんをはじめ、十七名の韓国大使の方々に本校を訪れていただきました。

私は、このプロジェクトがきっかけで、夏休み中に、韓

国を訪問することができ、国際交流をしながら、韓国の食文化を学ぶことができました。そこでは、日本の伝統野菜が海外で注目されていることを実感できたのです。

そして、昨年は、新しく美田園地区に韓国国際交流専用の白菜の畑を作り出すことになったのです。その畑では、二千本を栽培でき、全て収穫し、仙台白菜を使った韓国キムチの加工品へと結びつけることができました。

三年生に進級した今年、なんとうれしいことに、今までの私達の活動が評価され、韓国の企業「ジンロジャパン」の代表の方から、仙台白菜専用のハウスを建設していただくことになったのです。私は、「よし、今年は、栽培本数史上最高の三万本を達成させてやる!!」と決意したのです。このハウスを「宮城仙台白菜保護センター」と名付け、栽培できた白菜を更に拡大し、県内はもとより、全国各地へ流通販売していくのです。

私達のプロジェクトで栽培している本数は、宮城県の白菜の流通量の約三十%以上を占めるまでに達してきました。これからは、私達宮農と、韓国の皆さんと連携し、海外への流通販売を実現させていくつもりです。

私の目標は二つあります。

一つ目に、日本と韓国が手を取って協力し、耕作放棄地の畑の再生に役立てることです。産・学・官・民と連携、白菜の栽培本数を増加すれば、その苗の本数に比例して、白菜の生産量を大きく拡大していけると確信しています。

二つ目に、食料生産のための「種の確保」を拡大させることです。日本の白菜の発祥の地である、塩釜の野野島で、採種用の白菜の本数を三千本から、二倍の六千本にすることです。このことで、地元の種類会社への保存に協力するだけでなく、苗の確保につながるのです。

私は決めました。将来は大学に進学し、伝統野菜の学習を継続し、食の大切さを、多くの方々々に伝えていきたいと思えます。

震災を通じて

宮城県気仙沼向洋高等学校

三年 立花 来夢

震災で失われた大好きな町並み、たくさんのお家、そして命。震災当時の私はまだ幼く、状況を理解することがやっとでした。

学校では帰りの会が終わり帰宅しようとしていました。その矢先、ドカンと音を立て襲ってきた揺れ。こんな激しい揺れは初めてでした。泣き崩れる友人、戸惑う先生、避難訓練で実践したレベルではありませんでした。揺れがおさまっても次々と襲ってくる余震。鳴り響く大津波警報のサイレン。燃えている海。言葉も出ませんでした。電気もつかず、水もでませんでした。夜になると真っ暗で、はつきりと燃えている海が見えました。

次の日、私は海を見に行きました。私の学校は海から遠く、高台にあったため、津波の様子は全く分からなかった。昨日まであったはずの町並みが、たった一日で破壊されていました。元々あった地形がわからないくらいに瓦礫の山でした。私の母が自営していた美容室も跡形もありませんでした。見に来ていた人が口をそろえて

「もう気仙沼は終わりだ。」
と言っていたのを覚えています。その言葉は私にとって重い言葉で、気仙沼はもう元には戻らないのかと悔しく、辛い気持ちでいっぱいになりました。

日が経つにつれて、たくさんの方の支援や協力を得て瓦礫の山はどんどんなくなり、公園や学校の校

庭に仮設住宅が並びはじめました。瓦礫がなくなり、町を見てみるとまささうで何もありませんでした。ここからどのように復興していくのだろうかと不安になりました。

中学三年生になり、高校受験を控えていました。私は震災を通して、気仙沼にまた笑顔が戻り、震災で引越してしまったりした人や観光に来た人に、また気仙沼に来てもらえるような素敵な町にしたいと考えていました。そこで就職率が高く、熱い指導をしてくれる気仙沼向洋高校に入りたいたと考えていました。向洋高校は、津波の影響で校舎が使えなくなっていました。気仙沼高校の第二グラウンドに仮設校舎を建て、学舎としていました。

受験に合格し、高校生活が始まりました。向洋高校は体育ができるような校庭や体育館がなく、いつも他校までバスで移動して授業をします。部活動も同様です。他校の体育館やグラウンド、施設をお借りし、部活動に取り組んでいます。このように不便なところがたくさんあります。他にも、授業に使う道具などたくさんものを支援してもらいました。

とある日に教頭先生から「ニューヨークに行きませんか」という話をいただきました。「東日本夢の架け橋プロジェクト」という団体の方が震災で被害に遭った水産高校の生徒二名をニューヨークに招待してくれるという話でした。外国に行くことにより、自分の視野が広がり将来に役立つのではないかと思ひ、参加することにしました。ニューヨークでは、「ニューヨークで成功している日本人の方々からのお話、観光、そして、私たちの震災の様子を英語でスピーチするという内容でした。私は、町並みや文化が日本と全く違うことに驚きました。このように私がたくさんの方のことを学ぶことができたのも、震災があつて支援があり、たくさん

の人が気仙沼の力になりたいと思ひやりの心を持って行動してくださっているからだと思います。私自身、ニューヨークに行くという貴重な経験をさせていただき心から感謝しています。

高校卒業後の進路はやはり、気仙沼で少しでも多くの人の笑顔を見たいという気持ちがあつたため、地元で私にあつた仕事を探そうと思ひました。そして、先生から紹介いただいた、カフェの企業を志望しました。企業体験や自分で調べていく中でわかつたことは、専務さんは学生時代にニューヨークに留学しており、気仙沼に帰ってきたときに気軽に立ち寄れるコーヒー屋がないということに気づき、企業を立ち上げたということです。私は、ニューヨークで学んだことを生かせると思ひました。また、気軽に立ち寄れるお店であるため、たくさんのお客様を笑顔にできるのではないかと考えました。企業理念にも「一生に一度の喜びを提供しよう」とあります。震災でたくさんの方の経験を、学んだことを生かせるのはこのカフェだと考えました。そして無事合格できた今、来春からはたくさんのお客様を笑顔にしたいと思ひています。

震災で失つたものはたくさんあります。しかし、得たものも多いと思ひます。人と協力すること。支え合い互いのことを思い合うこと。世界の方々との絆が深まったこと。それは震災を経験した誰もが得たことだと思ひます。自分の考えも変わり、人のためになにかしたいと思ひやりの心を持てるようになりまし。現在も復興の途中ではありますが、マイナスのことばかり考えず、プラスに変えられるように努力していくつもりです。たくさんの方の経験を生かし、支えてくれたたくさんの方々感謝しながらこれからも頑張ろうと思ひます。

震災の記憶を後世に

宮城県志津川高等学校

三年 阿部 智大

震災から五年がたち、私は高校三年生になりました。今、こうして震災のことを思い返してみると、あの時は大変だったなと思う部分と、今の自分を見て変わったなと思う部分があります。震災の日、私は中学一年生で、三年生の卒業式の準備をしていました。ちょうど、私が体育館へ向かおうと一階の教室の廊下を歩いている時、大きな音と揺れが襲いかかってきました。私は急いで近くの柱にしがみつき、ずっと揺れに耐えていました。近くにいた先生が

「外に出ろ！」

と叫ぶと同時に、生徒全員が外の花壇広場に集まりました。みんな揺れの恐怖に耐えながら、じつとその場で座り続けていました。やがて揺れも収まり、避難者がぞくぞく学校に集まり、数分もしないうちに体育館が避難者であふれかえり、わずかな暖房機器に身を寄せ合いながらあたっていました。その夜、私たちは教室の中で体を丸めながら一夜を明かしました。停電のため教室にある全ての暖房機器が使えず、厳しい寒さの中みんなでお互い励まし合いながら寒さに耐えました。翌朝、私は登校坂から、すっかり変わった町の姿を見ました。一瞬で、頭の中がからっぽになりました。それと同時に、「これから、町はどうなるのだろう。」という不安にかられました。私の家は無事だった為、震災の翌日の朝から家族が迎えに来て、

家に帰ることができました。

それからというもの、私は新聞で学校の生徒達や町の人々が協力して支え合っているという記事を目にして、自分も何かの役に立ちたいと思い始めました。そして始めたのが、町の惨状を絵に描き写すというものでした。なぜ絵で描き写そうと思ったのかというと、私は小さい頃から絵を描くのが好きだったからです。その時は、後世の為に残すとか、そうした大層なことではなく、ただ単に何かの役にたきたいということで描き始めました。しかし、たまたま通りかかった新聞記者の方に取材を受け、新聞に取り上げられたことで、地元の人々や、記事を見た他県の人々から手紙をいただき、嬉しいという気持ちと、「より多く描かなければ」という強い気持ちが生えました。今、震災の記憶の風化という問題が取り上げられていますが、千年に一度という大災害の被害や悲しみを、後世の人々に伝えることの大切さと、その為の努力の必要性を強く感じています。

震災から約五年の月日がたち、現在南三陸町の土地のかさ上げやライフラインの整備など、かなり復興が進んできてはいますが、多くの町民の人々が、未だに仮設住宅に住んでいる状態です。しかし、あの未曾有の大災害の中、家や家族を失い皆うちひしがれていた中、人々が立ち上がってこられたのは、周りの人々が励まし合い、協力して生きていこうとしていたからだと思えます。人間という生き物は一人では生きていけない、弱い生き物です。ですが、集団の一人ひとりが励まし合いながら絆を深めていけば、とても強い力を発する存在になります。私はこの震災が起きたことよって、周りの人々がお互いに支え合い協

力して生きていく地域社会の大切さと、人と人との絆の大切さを学びました。

しかし、町の復興が進んでいるという反面で、震災の記憶が失われてしまうのではないかという危機感も募らせています。ごく最近では、南三陸町の防災庁舎を残すか残さないかという議論がありました。私が残すべきだと思ったり、それが私たちの責務だと思えます。私たちはこの千年に一度の大災害を、千年後の人々に伝え、しっかりとした防災の町になるように、写真や絵、または津波の爪痕が残った建物の保存など様々な方法や手段を使って伝えていく必要があると考えています。

私は今、大学の進学へ向けて受験勉強をしていますが、将来、私は自分の故郷である南三陸町でこの震災について語る「語り部」をやってきたいと思っています。今の南三陸町、宮城県または県外の人々がこの震災を教訓に、よりよい防災づくりの町や地域社会をつくり、後世の人々が幸せに暮らせるような町や社会になるように、貢献していきたいと思えます。